

7 馬にみられる病気

わが国の馬飼養頭数と中央競馬の診療概況

軽種馬育成調教センター 調査役 吉原 豊彦

これから当分の間、「馬にみられる病気」という見出しタイトルで記事の掲載をする予定です。内容は、軽種馬に多くみられる病気を中心に取り上げ、一般の皆さんにも十分に理解できるように、出来るだけ専門用語を使わずに表現したいと考えています。しばらくの間お付き合いいただき、軽種馬の生産および育成や走能力の向上並びに育成馬や競走馬にみられる様々な病気の早期発見や発生防止に少しでも参考になれば幸いです。

I. わが国の馬飼養頭数

1. 総飼養頭数の推移

今月号から「馬にみられる病気」という見出しで記事を掲載するわけですが、馬の病気の解説に先立って、最近わが国には何頭ぐらいの馬が飼われていて、どのような用途で使われているのだろうか？という、皆さんが知っているようで正確にはあまりよく知らないと思われる基本的な事柄から最初に紹介していきたいと思います。

最近、朝夕道を歩いていると頻繁に犬を連れた皆さんの散歩風景を目にするようになりました。犬は人のコンパニオンアニマルとして、完全に市民権を得たような気がします。もっとも気まぐれで、犬にしてみれば迷惑な飼い主もいるかもしれませんが・・・。

ヨーロッパでは、駅前や街中でしばしば馬や馬車を見かけることがあります。日本では馬が街路を歩いている姿を眺めることはほとんど皆無に等しいと思います。わが国では各国の新任大使が着任の挨拶で皇居を訪問する儀式である「信任状奉呈式」では、大使が東京駅周辺から皇居に向かう際、馬車か車かを選択できるのだそうです。信任状奉呈式は、外国の元首が発行した信任状を、着任した大使が天皇に届ける儀式です。これは、宮内庁、皇宮警察および警視庁がそれぞれ管理する馬を15頭前後の馬車列で構成するのが恒例になっています。そして、儀式を終えた馬車は

二重橋から帰ることが現在も行われています。

イギリスのバッキンガム宮殿では近衛兵の交代の儀式が4月～9月は毎日、その他の月は1日おきに行われており、多くの観光客で大変な人気を博しています(写真1)。さらに、パレードでは騎馬隊が整然と隊列をなしており、たまたま国際学会での発表のためロンドンを訪れていた私は、さすがにサラブレッド発祥国のことはあると、その華麗な絵巻に魅せられました(写真2)。その後、幸運にも公開されている宮殿内を覗くことができ、騎馬隊が隊列を組んで一般の街路を行進し、日常的に馬文化がごく自然に生活の中に融和している様子をまざまざと見せ付けられました。



写真1. 英国バッキンガム宮殿での近衛兵の音楽隊



写真2. 騎馬隊のパレード風景

FAO（国連食糧農業機関）の2002年データによると、世界人口は62億人ですが、家畜頭数は、牛13.6億頭、豚9.4億頭、羊10.3億頭、山羊7.5億頭および鶏163億7,000羽です（図1）。それでは馬の話題に移りたいと思います。世界の馬飼養頭数は約5,500万頭とされています。馬の飼養頭数の割合は、ラテンアメリカ43.7%、中国15.0%、北ヨーロッパ10.5%、北アメリカ10.3%、アフリカ6.3%と続いています（図2）。

わが国の馬は第二次世界大戦中には約150万頭あまり飼育されていましたが、現在は約10万頭程度に減少してきました（表1）。わが国の馬の総飼養頭数について、1990年から十数年間の推移をみってみました。用途別では、わが国の飼養馬の多くは競走用のサラブレッドであり、農用馬や乗用馬は少ないことが特徴です。この10年間の傾向をみると、乗用馬と食用の肥育馬が若干増えてきています。しかし、最近、軽種馬は地方競馬の廃止などに伴い需要が減り、飼養頭数も減少してきています。

2. 平成16年の飼養状況

わが国の2004年度の馬の飼養状況（表2）についてみてみると、軽種馬は合計53,000頭あまりです。軽種馬の生産頭数は8,300頭あまり、米国、オーストラリアを除くと年間の生産頭数はそれほど多くなく、サラブレッド競馬発祥地である英国はわが国より少ない状況です。軽種馬のうち競走馬は25,000頭前後

ですが、生産育成され競走馬としてレースに出走するのはそのうちの半数程度と考えられています。

在来馬は、北海道和種、木曾馬、対州馬、トカラ馬、御崎馬、与那国馬、宮古馬、野間馬の8種が日本馬事協会により日本在来馬と認定されていますが、年々減少傾向にあります。

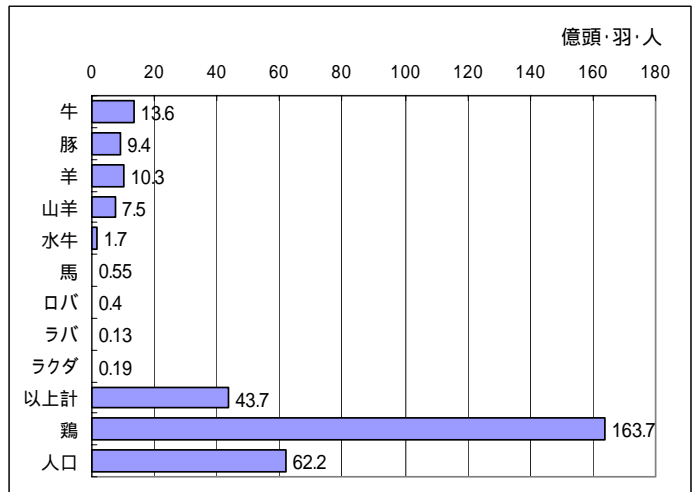


図1. 世界人口と家畜頭数（FAO 2002）

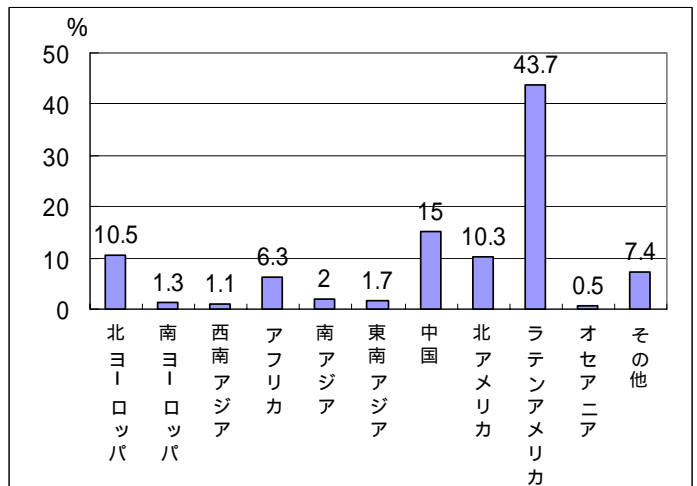


図2. 馬の地域別分布（FAO 2002）

表 1. 総飼養頭数の推移

(単位：頭)

年次	軽種馬	農用馬	乗用馬	小格馬	在来馬	肥育馬	合計
1990年	69,107	24,189	82,90 (8,290)	—	3,065	4,502	109,153
1991	72,467	25,608	8,981 (8,981)	—	3,450	5,273	115,779
1992	73,032	27,066	9,192 (9,192)	—	3,203	6,780	119,273
1993	72,779	28,378	9,797 (9,797)	—	3,361	6,778	121,093
1994	72,484	28,397	10,108 (10,108)	—	3,466	7,955	122,410
1995	70,640	27,601	10,766 (10,766)	—	3,157	10,070	122,234
1996	68,489	25,321	11,234 (11,234)	—	3,240	9,910	118,194
1997	66,688	24,853	11,369 (11,369)	—	2,898	9,506	115,314
1998	64,120	22,412	11,646 (11,646)	—	2,892	10,260	111,330
1999	61,954	20,574	12,189 (12,189)	—	2,677	9,436	106,830
2000	60,795	19,537	11,739 (11,739)	—	2,510	9,396	103,977
2001	59,883	18,236	13,274 (12,601)	2,013	2,458	8,700	104,564
2002	58,413	16,963	14,225 (13,457)	1,627	2,396	12,390	106,014
2003	56,087	15,057	13,755 (12,971)	1,610	2,300	13,136	101,945
2004	53,022	13,621	13,715 (12,971)	1,555	2,272	12,399	96,584

注) 乗用馬の()内は、乗馬施設で供用されている馬の内頭数

表 2. 2004年の飼養状況

区分	種雄馬①	繁殖雌馬②	産駒③	育成馬④	競走馬⑤	その他⑥	合計
軽種馬	350	11,125	8,348	8,332	24,867	—	53,022
農用馬	382	5,313	3,163	3,544	1,219	—	13,621
乗用馬	43	296	176	178	—	13,022	13,715
小格馬	130	653	362	410	—	—	1,555
在来馬	—	—	—	—	—	2,272	2,272
肥育馬	—	—	—	—	—	12,399	12,399
合計	905	17,387	12,049	12,464	26,086	27,693	96,584

* 軽種馬の①、②、③は、(財)日本軽種馬登録協会および(社)日本軽種馬協会「軽種馬統計」に基づいている。また、農用馬、乗用馬、小格馬の①、②、③および在来馬は、日本馬事協会調べである。育成馬の④はそれぞれの前年の生産頭数に0.95を乗じた推定頭数である。軽種馬の⑤は、日本中央競馬会および地方競馬全国協会調べである。農用馬の⑤は、地方競馬統計資料。乗用馬および肥育馬の⑥は、(社)中央畜産会調べ。乗用馬の⑥は乗馬施設で供用されている馬。

II. 中央競馬の診療概況

1. 所属馬の診療局所数

中央競馬で実際に活躍している競走馬の保健衛生情報は、軽種馬の生産育成に携わる皆さんにとって、優秀な競走馬を作る上で参考になると思われますので、日本中央競馬会(JRA)馬事部で編集し発行している競走馬保健衛生年報(2002～2006年の5年間)の各種統計データを分かり易く解説してみたいと思います。最初に、JRA 所属馬における診療概況で使われている各用語の定義について、説明しておきます。発生実頭数とは属する疾患に当該年に新たに罹患した馬の実頭数をいい、診療実頭数とは新患か否かにかかわらず、属する区分の疾患で診療を受けた馬の実頭数をいい、診療局所数は新患であるか否かにかかわらず、その区分内の疾患で診療を受けた馬の局所数を診療の都度合計したものです。各種疾患に罹患した場合の区分を新患と既往に区分し、新患では発生局所数についても区別して診療概況をまとめました(表3)。なお、保健診療とは疲労回復、骨軟予防、化骨促進、整腸、駆虫、洗点眼処置などの健康管理上必要な日常的診療をいいます。

次に、各種疾患別の診療局所数について5年間の平均を示しました。それによると、運動器系疾患が最も多く(95,073頭)、次いで呼吸器系疾患(13,264頭)、損傷(7,998頭)、皮膚疾患(7,309)、消化器系疾患(5,955頭)、感覚器系疾患(4,132頭)と続いています(図3)。

2. 各種疾患別発生実頭数

各種疾患別にみた発生実頭数についてさらに詳しく調べ、5年間の平均を示しました(図4)。圧倒的に多いのは運動器系疾患(10,395頭)で、肩跛行・寛跛行、筋痛、腱・靭帯炎、関節炎(球節・腕節)、骨折などが多くみられました。次に多いのは消化器系疾患(2,374頭)で、疝痛および歯牙異常が多くみられました。その次は、損傷(2,253頭)で、調教中やレース時に発症する挫創が多く、外傷性疾患によるものです。4番目に多いのは呼吸器系疾患(2,185頭)で、ここでは感冒、輸送熱、鼻出血が多くみられました。皮膚疾患(1,369頭)では、フレグモネ、皮膚炎、蕁麻疹が多くみられました。感覚器系疾患(444頭)では角膜および結膜炎が多くみられました。心臓・血管系疾患(57頭)では心房細動が多くみられました。造血・リンパ系疾患(26頭)では、リンパ腺炎がみられました。

表3. 診療概況

年	競走馬 在厩数	診療馬					
		発生頭数		診療頭数		保健診療頭数	
		実頭数	局所数	実頭数	局所数	実頭数	局所数
2002	1,537,472	33,056	47,112	47,835	133,703	47,128	61,338
2003	1,528,793	35,430	51,217	49,803	144,872	48,508	61,348
2004	1,539,379	35,984	52,382	49,333	137,462	49,325	59,442
2005	1,538,105	36,302	53,816	48,635	132,990	49,944	58,567
2006	1,535,127	37,844	56,891	46,997	131,132	50,913	59,029

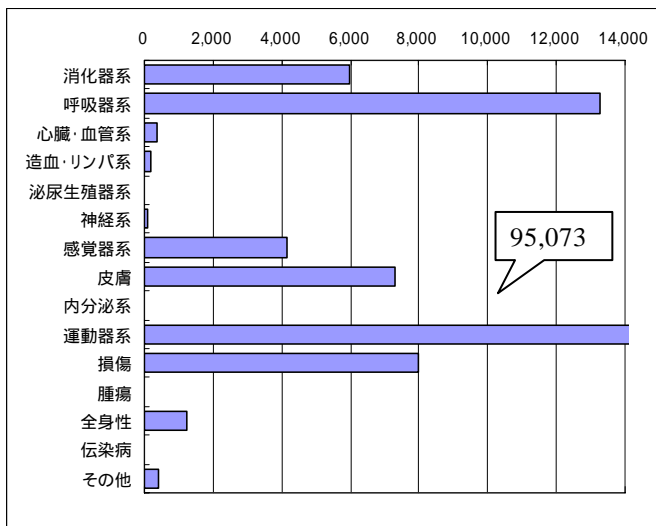


図 3. 中央競馬における各種疾患別診療局所数

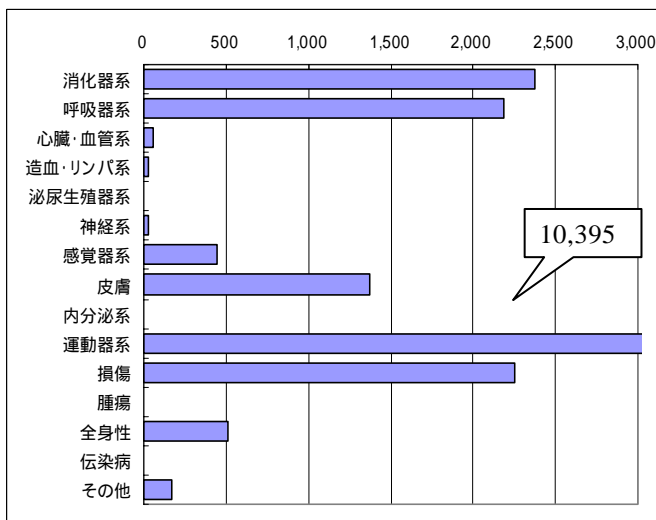


図 4. 各種疾患の発生実頭数

Ⅲ. 中央競馬の事故統計

1. 事故統計の概況

ここで取り扱う事故とは、競走中、調教中、輸送中の事故により発生日から一定期間（3、6、9 ヶ月、1 ヶ年）競走に出走できなくなった場合や死亡あるいは死にひんし救うことのできない状態に陥ったものと認められて安楽死の処置がなされた場合、また、競馬会の施設内において発生した疾病等をいいます。詳しくは中央競馬馬主相互会の競走馬事故見舞金支給規程に該当するもののうち一部を除いたものです。

各種疾患別にみた 5 年間の平均の事故統計では、圧倒的に多いのが運動器系疾患（平均 1,331 件）で、次に心臓・血管系疾患（平均 13 件）、

消化器系疾患（平均 10 件）と続きます（図 5）。競走馬の場合、より速く走ることを求められるため、レースや調教中に多くみられる事故は運動器系に集中することは当然のこととされます。

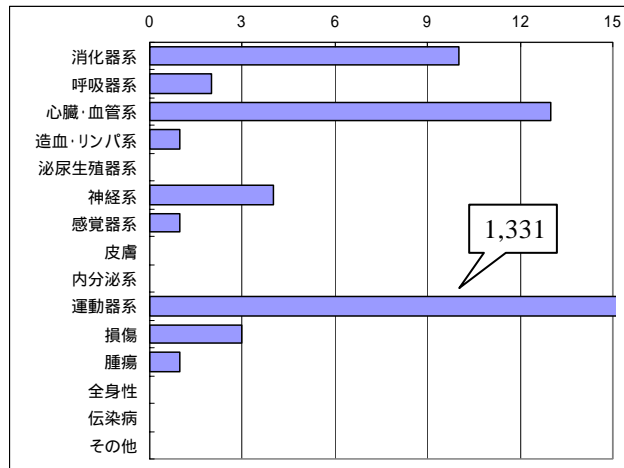


図 5. 事故統計の概況

2. 運動器疾患別事故統計

競走中や調教中事故において、5 年間の平均で最も多いのは運動器系疾患（1,330 件）であることから、その特徴について概説したいと思います。運動器系疾患で最も多いのは骨折（1,211 件）で、次いで多いのは、腱・靭帯断裂（91 件）であり、その中では不全断裂（77 件）が大部分を占めています。その次に多い運動器疾患は、関節の脱臼（20 件）です（図 6）。

骨折のうち一番多い骨折部位は前肢骨骨折（976 件）であり、次いで後肢骨（223 件）で、最後に頭蓋骨・胴骨（11 件）です。前肢骨の骨折についてさらに詳細に調べると、その中で一番多いのは指骨骨折（270 件）で、手根骨骨折（248 件）、橈骨が大部分を占める前腕骨骨折（223 件）、次いで中手骨骨折（171 件）となっています。同様に、後肢骨の骨折では、趾骨（63 件）、中足骨（47 件）、足根骨（36 件）、下腿骨（31 件）および寛骨（30 件）です（図 7）。

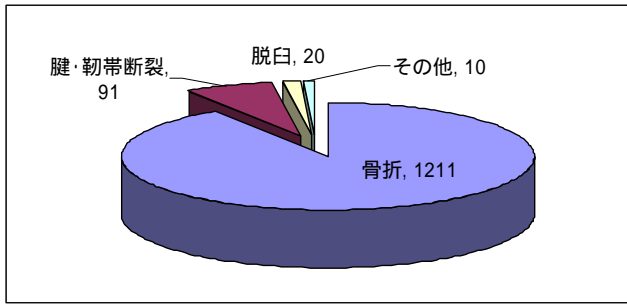


図 6. 運動器系疾患の事故統計

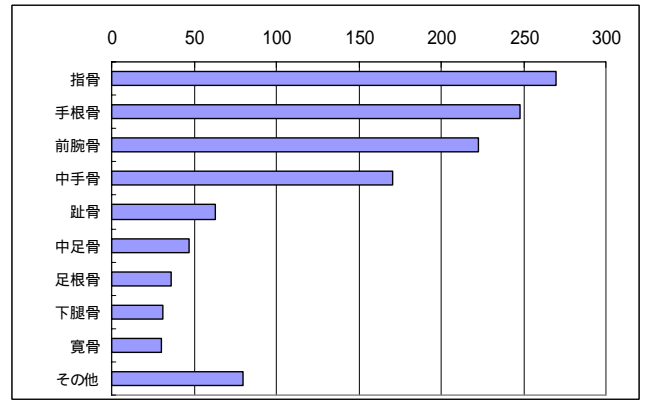


図 7. 四肢の骨折部位